

道徳科が全面実施された今、改めて道徳教育の充実を図る

【プロフィール】

埼玉県公立小学校教諭・教頭・校長、埼玉県公立中学校校長、川越市教育委員会指導主事、埼玉県立総合教育センター指導主事・同副所長、埼玉県教育局生徒指導室長付指導主事・同小中学校人事課主任管理主事・同家庭地域連携課長・同義務教育指導課長、開智国際大学教育学部准教授（現）

【論文（単）】「対話を重視した道徳科の授業をイメージする」、『開智国際大学紀要』、第19号、pp.87-97、2020.3

開智国際大学教育学部教員紹介 HP https://www.kaichi.ac.jp/teacher_tsuchii/

開智国際大学 准教授 **土井 雅弘**



はじめに

平成27年3月27日に学校教育法施行規則が改正され、「特別の教科 道徳（以下、「道徳科」と言う。）」が誕生した。今年度6年目を迎える。移行措置の期間を経て、小学校では全面実施され2年、中学校では1年が経過した。

「考え、議論する道徳」への転換が求められた道徳科の授業は、着実に充実が図られているように見える。しかし、中には、自分ごととして考えさせなければならぬと、「自分だったらどうするか」を繰り返し発問する授業や、問題解決的な学習として、「どうすればよいか」と生活レベルでの具体的な解決策を発表させ、まとめる授業も見られる。これらは、学習指導要領を形式的に、また安易な解釈により、道徳科の授業を陳腐化させている例である。道徳科の授業は、そもそも道徳とは何かを意識しながら、また、「自分だったら」と問われると、かえってあれこれ考えてしまい、正直に言えなくなるのが人間であるという、つまり、人間とはどういう存在なのかを意識しながら展開することが大事である。改正された学習指導要領の趣旨を十分に理解して、道徳教育を一層充実させていかなければならない。

さて、本稿は、道徳が道徳科として教育課程に位置付けられた時代の道徳教育をどう充実させていけばよいかを、全面実施され動き始めたこの時期に、改めて考えようとするものである。

1 道徳教育としてのいじめの問題への対応の充実

いじめの問題は、30年以上前から顕在化し、学校教育の大きな課題となっている。いじめは、子供の人権と命に関わる問題であり、学校教育のみならず、社会全体で取り組んでいかなければならない課題である。道徳が教科化された背景には、道徳教育の抜本的な充実を図り、いじめの問題を本質的に解決しようとする強い意思、願いがある。学校は、このことをしっかりと受け止め、道徳教育としてのいじめの問題への対応の充実を図っていかなければならない。

それには、いじめ防止の項目を全体計画に位置付け、道徳教育におけるいじめ防止の進め方を教職員で共通理解するとともに、取り組む内容や時期を明確にすることが大切である。つまり、学校の道徳教育としていじめ防止の取組をどのように考えるのか、具体的にいつ、何を、どのように実施するのか等を文章化することである。実施計画を全体計画に添付しておくことも工夫の一つである。

道徳教育は、人間としての生き方、自己の生き方の指導である。「いじめをしない、させない、許さない」生き方を道徳の内容項目との関わりにおいてどう育てていくか。生命が大切であること、相互に理解し合うこと、協力し助け合うこと、信頼し友情を深めること、節度ある言動や思いやり、寛容の心などをしっかりと育て、それらを日々の生活の中で実現できるように、学校としてどう環境を整え、指導していくかである。

私は、いじめの問題への対応として道徳教育がしなければならないことは、道徳科の授業と関連して、いじめをしてはいけない理由をしっかりと腹の底から理解させることだと考えている。思い切って言えば、いじめがなくなるのは、子供たちがもっているいじめをしてはいけない理由が曖昧だからである。学年段階に応じたしっかりと理由をもっていないからである。例えば、小学1年生は、なぜいじめをしてはいけないか問われれば、「先生に怒られるから」と答えるかもしれない。この理由をしっかりと実感をもって納得している子供は「先生に怒られるから」がプレーキになっていじめをしない。しかし、中学3年生になってもその理由が曖昧で、「先生に怒られるから」程度では、いじめを抑止することはできない。学年の段階にふさわしい適切な理由をしっかりともっていることが重要である。いじめをしてはいけない理由が、子供の発達に応じて更新されていくことが大切である。中学3年生であれば、「人間の尊厳に関わるから」、「人間としての生き方としていじめはしない」と、人間としての生き方、自己の生き方としてその理由を腹の底からの言葉として言えなければ、自分の弱さに打ち勝つこ

とは出来ない。また、人間としての誇りをもっていじめと対峙する生き方はできない。正に、道徳的価値、人間としての生き方の自覚の問題である。しかし、実際には難しい。大人であっても腹の底からいじめをしてはいけない理由を明確にもっているとは限らないからである。だが、諦めてはならない。道徳教育の使命として、何としても人間としての生き方、自己の生き方として、いじめの問題と真剣に向き合う子供を育てていかなければならない。

そのためには、まず学校は、全体計画を確認し、いじめ防止の対応が位置付けられているか、位置付けられていなければ、早急に見直し、改善を図ることが重要である。

2 各教科の授業改善により、道徳科の充実を図る

これからの授業は、「主体的・対話的で深い学び」を視점에充実させていかなければならない。道徳科においても同様である。「考え、議論する道徳」が目指すものである。

道徳科の授業を充実させるためには、他の教科の授業を本気で、「主体的・対話的で深い学び」のある授業にすることが大前提である。何故ならば、道徳科は週1時間である。その道徳科の授業だけで、子供たちが真剣に考える、友達と話し合う、形式的でなく友達の意見に耳を傾け、自らの本音を語り、対話するような授業ができるようになるとは決して思えない。教員にしてもそうであろう。他の教科で子供たちの発言を、正否を基準に受け止め教えることにウエイトをおいて授業している教員が、道徳科だけ「考え、議論する道徳」の授業を展開することができるとは思えない。

そもそも授業は、教科の授業も道徳科の授業も同様に、目標達成に向けて集団思考を行う教育活動である。例えば、発問を軸に授業展開する場合、発問によって豊かな学習活動を保障することが重要である。つまり、発問によって様々な意見を引き出し、意見交換をしながら本時のねらいを踏まえて焦点化し、意見の吟味を通して、子供たちが自ら解を掴み取っていくものである。この解が道徳科の授業では、納得解であり、ここに教科との違いがあるだけである。集団思考の流れ、学習活動に大きな違いがあるわけではない。教科の授業に長けた教員が、「考え、議論する道徳」になんら違和感をもたないで、道徳科の授業に取り組んでいる例が多いのはそのせいである。

道徳科の授業を充実させるためには、各教科の授業を「主体的・対話的で深い学び」を視点に一層の充実を図っていくことが極めて重要であると言えよう。

3 「考え、議論する」道徳の授業を着実に実践する

今回の学習指導要領の改訂により、道徳科の目標に学習活動が位置付けられた。つまり、①道徳的諸価値

についての理解を基にすること、②自己を見つめること、③物事を（広い視野から）多面的・多角的に考えること、④自己（人間として）の生き方についての考えを深めることである。この4つを要件として授業を行うことが重要である。道徳科の授業は、道徳的価値についての学習である。それは自己の、人間としての生き方の学習である。この学習を成立させるために、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考えることが必要だということである。

私は、この4つの要件を満たす授業として、子供たちがもっている多様な道徳的価値に対する感じ方や考え方、つまり道徳的価値観を引き出し、それを一歩でも高めるための授業として、「二分法と本質的な問いのある道徳科の授業」を提案している。

道徳的価値観は、通常、行為や心のもち方の選択に迫られたときの判断基準として機能する。行為等の選択が、正にその人の生き方である。この判断基準の質をどう高めていくかが道徳科の授業のねらいと考えている。具体的には、教材の登場人物が行為等の選択に迫られている場面を捉え、子供たちの道徳的価値観を引き出し、それを整理するために二分し、更に掘り下げていく。その過程で、子供たちとの対話を重視し、本質的な問いを投げかけながら、子供たちの道徳的価値観を吟味し、一歩でも高めようとする授業である。

道徳科の授業改善が進む中で、対話的な学びを重視しようと、少人数での子供同士の話し合いを学習活動に位置付ける授業が多く見られるようになった。これは良いことと捉えている。しかし、子供同士の話し合いは、意見交換に留まっていることが多い。意見交換だけでは、対話的な学び、ましてや深い学びを保障することはできない。意見交換を踏まえ、子供たちが自分の考えをより高めていくためには、教員がソクラテスになって積極的に関わり、問い掛け、その考えを吟味していく対話が重要である。

各学校は、自校の道徳科の授業が「考え、議論する道徳」、「対話する道徳」になっているか早急に確認し、十分でなければ授業研究会を定期的に開催し、学校として道徳科の授業改善に本気で取り組む覚悟が必要である。

おわりに

これからの社会は厳しい挑戦の時代になると言われている。それは、人がどう生きるか、生き方が問われる時代ということである。学校は、これからの時代を心豊かにたくましく生き抜く子供たちを育てるために、その責任を負わなければならない。道徳的価値について考え、自己の生き方、人間としての生き方について考えを深める学習をしっかりと保障する学校でなければならない。心して取り組むことが、道徳科が全面実施となり動き始めた今、何よりも重要である。